

は獨乙、奥國及び、瑞西に及んで或は極東國にまで及した基督教の偉大なる傳道とその力を考へる時、フランシス・ザビエルその他極東傳道者の名を想起すると共に聖コロンバに廻らざるを得ないのである。自己の不注意に因し島の娘にほだされた二泊が豫期せざる靈驗を得た。

「アイオーナの十字標柱」英蘇愛の諸島を通じて大小の都會には必ず十字標柱がある。その数を總計する時は恐らく幾千と云ふ多數に上るであらう。然し完全に保存されてあるものは至つて少い。異國旅客は倫敦のハイデ・パークに隣接するケンシングトン・ガーデンに建てられてあるアルバト記念塔を見、その礎石に並べる先哲偉人の像に好奇の眼を向けた後その建築の形式の由來を聞く時考古的興味を喚起される。古本を漁る者等がお百度を踏むチャリング・クロス街の町名の起源である十字標柱が稍もすれば見逃し易い處に完全に保存されて居るのを見、その由來を教へられて亦歴史の興味を覺えるのである。今アイオーナの僧院跡に建てある十字標柱が各地にある幾多の標柱とは趣を異にし古雅拘す可きものあるを悟り一見其印象の拭ひ去り得ざること感ずる。十字標柱或は墓地に或は都會の町辻に或は野州のうちに悄然物淋しく立つて居るのを見て何の爲めにそんなものが建てられてあるかに疑問を抱く。

抑も十字標柱(Cross)と云へば誰しも考へるが如く基督が磔にされた十字架を象徴して作られたものであるが、實際の標柱を見ると變形が生じてあるので説明を聞いてはじ

めてそれだと領かれる程なものもある形式に於て種々變化があると同じくその建立の目的に於ても種々雑多である。第一純然たる記念の目的にて建てられた記念塔がある。記念するに値する人物を記念することもあれば、一大事件の發生を記念することもある。動物保護の目的にて殺生禁斷の地を標示する爲めに建てられたものもある。罪人すら十字標柱下に立つが爲めに捕縛を免れた例すらもある。泉を湧出せし井戸のあることを示すが爲めに建てられたものもある。以上は何れも記念塔の部類に屬するものである。次は境界標として建てられたのがある。村と村、教區と教區、莊園と莊園との境を標示するのがそれである。

新刊紹介

○人文地理學

ツヤンアリユンヌ著
松尾俊郎抄譯

古今書院發行 六月十四日 定價四圓二十錢

本書は有名な佛國の人文地理學者アリユンヌの、英譯から抄録したものであるから、重譯といふ最初からの懼みがある日本人にはあまり重要でなからうといふので、自然區域の特殊研究に關する第六章の沙漠の島と、第七章の高山の島とを割愛されたといふのである。しかし地理學の本質論や人文地理學の主要事業などの箇所は出来る限り忠實に譯出されてあるといふことである。書寫忽卒の間ゆつくり原書と照合して

披閱するの時間を持たない筆者は、かうした抄譯が出版されて我國の人文地理學者に教うる所の多いことを感謝する。しかし本書はいづれかと云へば概説であつて、人と土地との相互關係を論ずるに當つての根本資料たる事實は餘りに簡短に記してある、従つて地球全般に亘る確定なる知識を持たぬものには、論述が急速に展開されてゆく爲めに、却つて力弱く耳底にひびくに過ぎない、例令ば家屋と道路の章に於てツォーシュ山地の標式的の家屋はどうしたと書いてあつてもツォーシュを知らぬ我々にはさうですかである。歐洲の森の家はかうだとするしてあるが、これは人文地理學上特定の地域の現象であつて球上の一般現象ではない、茲に於てか翁一步をすゝめて、かうだからかうだといふ觀念を明瞭にするために讀む者に努力がある、章と章とは巧妙にわけられてあるし圖版の排列も面白いが、地理的理由が極めて簡単に叙述されてゐて、而かも歴史的回顧が不足してある恐がある。しかし我々はかうした佛國の人文地理學者の邦譯を得て、この學問が今どの程度にまで築かれやうとしてゐるかの梗概を容易に知り得るに至つたことを喜ばねばならぬ。但し東洋に於ける人文地理の現象には東洋特殊の人文現象があり、類を殊にした村落や都市の機制がある。故に本書を讀むことのみによつて、日本の村落や都市は明にされがたいと思はれる。筆者は多くの同學の人と共に一日も早く日本又は東洋の人文地理學を生長させてみたいと考へる。(藤田)

○世界地理行脚

寺田貞次著 古今書院昭和四年六月廿九日發行 定價一圓八十錢

古今書院は近頃無茶苦茶に地理書を出版して、出版界の驚異をひいてゐる位であるから、同院の出版物としての本書の如きはその餘勢であるとみてよい。學友寺田貞次君が本誌上に連載された「歐米の地理學界」をこのたび一まとめにしられたもので、菊版二六二頁の小冊子である。いろ／＼各國の地理學の様子をのべ最後に我國地理學界に對する忠言？がのつてゐるのも結構なことである。(M)

○我が殖民地

濱田恒之助共著 富山房 定價三圓八十錢

昭和三年二月十八日發行 富山房 定價三圓八十錢

本書は舊の内閣折殖局長濱田氏が大山氏と共に我が殖民地を視察してその事情を叙し、時には種々の當面の問題にもふれてみて、差支のない範圍に於て之を解説したもので、四六版八七三頁の大冊であつて、滿洲朝鮮臺灣樺太の四編及殖民地統計の附録一部よりなる。時の公務を帯びた人の旅行であるから、我等が觀光に行つた時に出逢ふやうな人との交渉でなく、視察場所も夫々意味の深い所であるから面白い節が多い、滿洲の商租又は臺灣の文化協會問題だけでも一讀の價値がある、文章も平易で、寫真も多い、鎖夏的好讀本たるのみでなく、殖民地へ旅行せんとする人又は日本の多くの青年に讀んでもらうべき本であると思ふ。(藤田)